

二宮フサ先生のご退任にあたって

井村実名子

去る3月31日、40年勤続者表彰式のために大学に来られた二宮フサ先生と私たちは外国語研究室でいつものようにお茶を飲んで無駄話をし、私も町に用があったので吉祥寺まで一緒にバスに乗り、駅前でお別れした。大学にはお見えにならなくても、いつでもお会いできる気だったのだが、4月の最初の教授会で、いつも間近にあったフサ先生（この親しい呼び方をお許し願いたい。私たちの恩師であるご夫君、二宮敬先生との混同を避けて自然に定着した《愛称？》ですから）のお顔が見えないことに、私は何ともやりきれない空虚感におそわれた。はじめ空いていたいつもの席に誰かが来て事もなげに座り、気がつくと周囲に空席はひとつもない。出席率が良いらしい。そのうちに名誉教授推薦の話が出て、二宮教授勤続40年の経歴が披露されると、ほおーという小さな驚嘆の声があちこちに上がった。

だが40年は専任在職の年数であって、第十高女四年生のとき本学の夏期講習に参加した1942年から数えれば、実に半世紀を越える長い長い思い出の場所がこの善福寺キャンパスなのだ。本学の外国語科を卒業後（1949年）、東大仏文科、同大学院でフランス文学を専攻され、フランス語教師としてのデビューは津田塾大学が一年先だったが、1954年春から本学の教壇に立ち、翌55年は専任講師の身で、フランス政府給費生として秋から2年間パリ大学に留学された。帰国後は孤軍奮闘のなかで徐々に独りから二人、三人と専任ポストを増やし、フランス語教育の改善に努力された。こうして重い役割を担われた生涯の職場を離れると思えば、いかに気丈なフサ先生だとて、悲喜こもごもの追憶に感無量にちがいないと誰しも思うのだが、ストイックなまでに潔く、晴れやかな笑顔で去られたのだった。大袈裟な行事はお嫌いなので、最終講義はもちろん花束さえも固辞され、同僚はどうやって積年の感謝を表せばよいのか途方にくれたのだが、最後の授業の日に先生お気に入りのホテルで持たれたごく内輪のお別れパーティは和気あいあいの快い集いとなった。親しい学生から贈られた花束は先生を喜ばせたが、一番感動された贈り物は初級第一クラスの学生たちが「桃太郎」と「かぐや姫」をフランス語で語って録音したカセット・テープであった。同じ組を担当したデュシュッド先生が発案し、ひそかに学生を指導して仕上げた傑作だ。

教師は誰でも自然の情として学生を愛するけれども、フサ先生の学生に注ぐ愛情の美しさはほとんど崇高の域にあると私はいつも感腹していた。その愛は彼女の人柄そのままにこよなく純粹で、手放しの信頼と善意に溢れていた。「初めてフランス語に接する学生の緊張と期待が怖いほど迫ってくる、最初の授業の空気」を思うと、前の夜の

どきどきして眠れない気持ちは40年を通して決して変わることはなかったと、退職の言葉にあるが(「学報」, 95年3月号), この告白にはいかなる誇張も気取りもないからこそ、私は深い感動に打たれる。この「最初の授業」に関しては、「三崎町のアテネ・フランセ」という先生の戦中回想記が思い出される(「ふらんす手帖」7号)。昭和19年秋、戦禍に脅える暗澹たる東京で、彼女は向学心に燃える目もと涼しき18歳の乙女であった。新聞広告で見つけた神田三崎町のアテネ・フランセで初めてフランス語を学び始めたときの熱い期待を、50年後も忘れずに、自分の学生たちに投影する教師の情熱——まさしく「初心忘るべからず」の教訓そのままのフサ先生の汚れなき精神は、激しい世相の変動を越えて、若い芽の柔らかな感性に強力なインパクトを与えずにはおかない。東京大空襲で焼けたアテネ・フランセの残骸の前に立ったとき、少女の胸の奥でぱたりと窓が閉まり、そのときだけは腹の底から戦争は嫌だと感じた、と書かれている。フサ先生のフランス語の原点を私はこの焼跡の風景に見たのだった。

専門領域での数多い業績を要約しよう。先ず、13年の歳月をかけて完成した『スタンダード和仏辞典』(共著, 1970)が重要である。根気の要る困難で地味な仕事である。また、わがフランス文学界の優秀な翻訳家として令名高く、正確かつ気品あふれる文体には定評がある。17世紀から現代までの広い範囲にわたる翻訳書があり、主要なものだけでも、ラシーヌ『フェードル』, ラ・ファイエット夫人『クレヴの奥方』, ラ・ロシュフコー『箴言集』などの古典文学の最高傑作のほかに、ポーヴォワール『女ざかり』, 『ある戦後』, 『決算のとき』, 『別れの儀式』(以上, 共訳), サルトル『ポーヴォワールへの手紙』, デスノス『おはなしうた』などが注目される。研究家としては、とくにラ・フォンテーヌの周辺に関心がおありで、多くの精緻な論文がある。叙勲は84年にフランス政府からパルム・アカデミック教育功労賞(シュヴァリエ級)を受けられた。

大学紛争の嵐が去った頃、フサ先生は当時の同僚(久米あつみ氏と私)を勧誘し、好きなことを自由に書ける同人誌の創刊を発案された。渡辺一夫先生に頂戴した洒落た装丁を使い、内外の同僚、知人に寄稿をお願いして、二宮フサ主宰「ふらんす手帖」は72年から毎年、その後専任になる佐々木涼子、吉川一義も仲間に加え、18号まで刊行した。88年に久米、吉川両氏が他大学に去り、連絡不備やら疲労やらで89年で廃刊にしたが、壮年期の力溢れるわれらが女王に統率された「ふらんす手帖」の活動期は外国語研究室の最も意気盛んな時代だったのかもしれないと、今顧みて痛感する。人はみな平等に老いる。とはいえ、今なお心身ともに18歳の乙女のように若々しいフサ先生は自由の大地でさらに羽ばたいて立派なお仕事を続けられるにちがいない。そして残された者は女王の支柱を奪われた厳しい状況から何らかの新たな発展に向けて奮起しなければならない。